Osaka University Knowledge Archive

Title	「廓内よりの歸り」は朝帰りか？ : 「たけくらべ」注釈をめぐって
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	阪大近代文学研究. 2015, 13, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68333
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「廓内よりの帰り」は朝帰りか？
――「たけくらべ」注釈をめぐって――

出原 隆俊

テクスト読解において、ある部分の解釈を巡って、研究者によって見解が分かれることはままある。勝負はどのような証拠を提示するかにあるのは当然のことだが、決定的に誰もを首肯させるものはまずない。そのために如何に証拠固めに接近するかの方法の積み重ねが問われることになる。一葉のテクストは「にごりえ」末尾の合意心中か無理心中か、「たけくらべ」の美登利の変貌が何によるのかが、長らくの議論の中心点となってきた。

「たけくらべ」の次の箇所の解釈についても、それらほどには重視されてこなかったものの、問題点の一つとはされてきた。山田有策氏は本作全体の把握にかかわる重要な問題だとする。

驚いて見返（かへ）るに暴れ者の長吉、今廓内よりの帰りと思（覚）しく、裕衣を重ねし唐棧の着物に柿色の三尺を例の通り腰の先にして黒八の襟のかゝつた新らしい半天、印の傘をさしかざし高足駄の爪皮も今朝よりぞとしるく（とはしるき）、漆の色のきわぐくしうて立ちけり（見えて誇らし氣なり）。

【本文は初出『文學界』のもの。（　）は再掲の『文藝倶楽部』のもの】

このことに触れている注釈には次のようなものがある。

○江戸時代は、職人で吉原に行かないものは、変人扱いにされたり、仲間づきあいをしてもらえなかった。また、当時の男性が女性を知るのは、ほとんど遊郭で、一五、六歳になると、先輩が無理やり連れて行った。この風習は明治になっても下町には残っていたと思われ、とび職の頭の役を継ぐ長吉は、そういう経験を積む段階にあった。一人前のおとなになった長吉が信如の世話を焼く態度からも、なんとなくよみとることができるだろう。（『日本近代文学大系　樋口一葉集』和田芳恵、一九七〇）

○いわゆる朝帰り。当時の十六歳で、鳶の頭の子でもあり、

「暴れ者」の長吉だからありうること。（『全集　樋口一葉』岡保生、一九七九）

○遊郭からの朝帰りとみるべきであろう。十六歳で「仁和賀の金棒に親父の代理」をつとめるぐらいであるから土地柄からみても考えられる。ただし、「後刻に學校で逢はうぜ」から、小学生の朝帰りとみれば気になるが、ここは今日的常識でみてはいけない箇所の一つであろう。（『樋口一葉』木村真佐幸、一九八〇）

○江戸では吉原、大坂では新町の遊郭を「なか」といった。「廓内よりの帰り」は朝帰りであろう。まだ学校通いの身ではあるが、年は当時の十六歳、鳶頭の子で、暴れ者であり、何よりもこの朝の扮装を見ればそう考えられよう。「新らしい半天」、「爪皮も今朝よりとはしるき」、「誇らし気なり」などには初登楼が暗示されているのかもしれない。（『校注　樋口一葉』中野博雄、一九八二）

○諸注は「朝帰り」とする。（『近代文学初出復刻　樋口一葉集』青木稔弥、一九八四）

○頭の長吉の登場である。いなせなファッションで誇らしげに登場しているが、これは廓の初買いに他ならない。雨になったので、登楼した廓の屋号の印の入った傘を借り、意気揚々と家に帰ろうとしていたのである。おそらく両親が新しい着物や足駄をととのえて息子を廓へとおくり出したのであろう。廓への登楼は大人になるための儀式であり、ここですでに長吉は大人の世界に一歩足を踏み出していたのである。（『「たけくらべ」アルバム』山田有策、一九九五）

○吉原遊郭からの朝帰りであろう。長吉はすでに十六歳で、「仁和賀の金棒に親父の代理をつとめ」てもいるのだから不思議ではない。（『新日本古典文学大系　明治篇　樋口一葉集』菅聡子、二〇〇一）

△『樋口一葉小説全集』（長谷川時雨、一九五七以前）、『校注　たけくらべ・にごりえ』（大野茂男、一九六〇）旺文社文庫（塩田良平、一九六七）角川文庫（岡田八千代、一九六八）、『一葉文学選』（山根賢吉、一九八七）、新潮文庫　などには注はない。

「諸注は「朝帰り」とする」という青木氏の歯切れの悪さは無責任とのそしりを免れまいが、何やらそれまでの解釈に疑念を抱いているようでもあり、踏み込んだ解釈をした山田氏を除いては多くはすっきりとしないものである。それは「廓内よりの帰り」という言葉に捉われて、この箇所にかかわる必要な情報集めに不用意な部分があるからだと考える。たとえば、「第一彼奴は交際知らずで女郎買一度一所にせず、好闘鶏鍋つつき合つた事も無い唐偏朴、（幸田露伴「五重塔」）」という例は鳶ではないが、職人である。これは和田説の「職人で吉原に行かないものは、変人扱いにされた」を補強するようだが、それは多くの場合、単独行動ではないのであり、この場合の長吉には適用できまい。

【「廓内」とは何を指すか】

まず、「廓内」について検討しよう。「土手をのぼりて廓内までも入込まんづ勢ひ」(第二章)、「廓内の大きい楼」(第四章)、「廓内の大巻さんよりも奇麗だと皆がいふ」(第六章)、「お顧客は廓内に居つづけ客のなぐさみ」(第八章)「父親はお辞義の鉄とて目上の人に頭をあげた事なく廓内の旦那は言はずともの事、」(第十章)、「お前は知らないか美登利さんの居る処を、己れは今朝から探してゐるけれど何処へ行たか筆やへも来ないと言ふ、廓内だらうかなと問へば、」(第十四章)、「相手は誰れだ、龍華寺か長吉か、何処で始まつた廓内か鳥居前か」・「用ある折は廓内の姉のもとまで通へど、」(十六章)ともあり、性的交渉の直接的な場所を指す第八章(そこだけは「かくない」とルビが振られている)を例外として、あくまでも廓の外側と対比した内側という場所一般を示すものである。これは一葉のみに限ったことではなく、泉鏡花「註文帳」(「廓内の名望家」、「毎日研物の荷を担いで、廓内をぶらついて、」)も同様(ただしルビは他の箇所で「くるわうち」とある)である。永井荷風の「草紅葉」も「廓内の女たちがその周囲のものから一種の尊敬を以て見られていた江戸時代からの古い伝統が、」とある。「廓内よりの歸り」を後にある「朝湯の歸りに首筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓がへりの若者は申き、(三章)」における「廓がへり」と同一視する事はできないのである。このことは「通ふ子供の數々に或は火消鳶人足、おとつさんは刎橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、」(一章)とあるように、鳶の頭の父親を訪ねた帰りというように考えれば朝帰りと取らずとも理解できることになる。「御苦勞でも學校前の鳥渡の間に持て行つて呉れまいか、」と使いに出された信如と同じく使いの帰りの長吉が「後刻に學校で逢はうぜの約束」をすることとも呼応するのであり、「小学生の朝帰りとみれば気になる」などとためらいがちな結論を出す必要はないのである。鳶の頭の息子だから初買いをさせたとする山田氏の解釈も、次の例を対置すれば無化されよう。「今戸心中」を参照しよう。

午前の三時から始めた煤払は、夜の明けない中に内所を了ひ、客の帰る頃から娼妓の部屋々々を払き始めて、午前の十一時には名代部屋を合せて百幾箇の室に蜘蛛の網一線剰さず、廊下に雑巾まで掛けて了ッた。出入りの鳶の頭を始め諸商人、女髪結、使屋の老物まで、目録の外に内所から酒肴を与へて、此日一日は無礼講、見世から三階まで割れる様な賑わひである。

廓の煤払いの光景である。廓とこのようなかかわりを持つと考えられる「鳶の頭」である長吉の父親がわざわざ「新しい着物や足駄をととのえて」廓に送り出すとは考えにくいであろう。「爪皮も今朝よりぞとしるく」見える「高足駄」を父親が息子が廓に行く時に用意したのなら、「今朝より」では

ないし、それを廓側が用意するはずもない（ただ、店が下駄を貸すことは、「山吹」にも「旅館の貸し下駄にて」とある）。また、「今廓内よりの歸りと思（覚）しく」と捉えたのは語り手の視点というよりは、信如のものであろう。この見極めは極めて重大である。それは山田説などが指摘するような初めての朝帰りと信如が察知するということはあり得ないということである。長吉が初めての朝帰りをし力んでいるとすれば、それを受け止める信如の方にもそれなりの感慨があるはずであるが、そういう様子は全く描かれず、ごく平常のように素直に応対している。では、なぜ信如は驚きもなく「廓内よりの歸り」と捉えたのか。少しあとに「信如は田町の姉のもとへ、長吉は我家の方へと行別れる」とあることを踏まえれば、田町への途上で、自宅ではない方向から長吉と出会うのをいつものこと（「祭りの夜は田町の姉のもとへ使を吩附られて、」（第十章）ともある）からそう捉えたということになろう。仮に朝帰りとすれば、客は大門から出るはずで、長吉はそこを出て、左に曲がって鉄漿溝にそって歩いてくるはずである。ちょうどそれと同じことは泉鏡花「註文帳」にある次の箇所を参照できよう。

　欽之助が田町の方へ向つて来ると、鉄漿溝が折曲つて、切れようといふ処に、一ツだけ、その溝の色を白く裁切つて刎橋の架つたままのがあつた。

そこは信如自身が田町に行く途上であり、長吉も田町の方からやってきたことも十分に考えられるのである。その方向から長吉がやってきて、美登利の住む寮の前で信如と出会ったのだから、信如には大門を出てきたことはわかるはずはない。

　それでは、番屋にいる父親を訪ねた帰りだとすれば、番屋はどこにあったのか。当時の資料によって復元されたものによれば、数か所にあるようであるが、どの番屋に長吉の父親がいたにしろ、朝帰りならば大門を通って帰るはずだから、位置は問題ないことになる。しかし、その場合、先に述べたように、「廓内よりの歸り」だと判断はできない。すぐ近くの刎橋を下してもらって廓の外に出た長吉と信如が出会ったから「廓内よりの歸り」だと判断したということになるのではないか。用例を見てみよう。先の「註文帳」の引用も踏まえる必要があるが、「たけくらべ」自体にもある。

　茶屋が桟橋とんと沙汰して、廻り遠や此処からあげまする、誂へ物の仕事やさんとこのあたりには言ふぞかし、（第一章）

他の例はどうか。

・ぼんやり明のついてるのが見えてね、刎橋が幾つも〳〵、宛然卯の花縅の鎧の袖を、恁う、

　借着の半纏の袂を引いて。

「裏返したやうに溝を前にして家の屋根より高く引上げてあつたんだ。」

　それも物珍しいから、むやむやの胸の中にも、傍見が

てら、二ツ三ツ四ツ五足に一ツくらゐを数へながら、靴も沈むばかり積つた路を、一足々々踏分けて、欽之助が田町の方へ向つて来ると、鉄漿溝が折曲つて、切れようといふ処に、一ツだけ、其の溝の色を白く裁切つて刎橋の架つたままのがあつた。（「註文帳」）

・「花魁、大変ですよ。吉里さんがお居でなさらないんですッて」

「えッ、吉里さんが」

「御内所ぢや大騒ぎですよ。裏の撥橋が下りてゝ、裏口が開けてあッたんですッて」（広津柳浪「今戸心中」）

このようなことを押さえたうえで、刎橋から外に出たと考えれば、信如が美登利の住む寮の前にいることから、「むむ美登利さんはな今の先己れの家の前を通つて揚屋町の刎橋から這入つて行た、」（第十四章）とある揚屋町の番屋から帰ってきたものと思われる。このように「廓内よりの歸り」を「廓がへり」と解釈する必然性はないのである。

こうしたこと以外にも、次のような個所を視野に入れたい。

【印の傘について】

横町組と自らゆるしたる亂暴の子供大將に頭の長とて歳も十六、仁和賀の金棒に親父の代理をつとめしより氣位ゐらく成りて、帶は腰の先に、返事は鼻の先にていふ物と定め、にくらしき風俗、あれが頭の子でなくばと鳶人足が女房の蔭口に聞えぬ、（二章）

山田氏は先の箇所を「初買い」だとして「誇らしげ」と捉えるが、「三尺を例の通り腰の先に」とあるのはここの「帶は腰の先に」と対応しており、普段通りである。また、「誇らし氣なり」は再掲の際に書き換えられたものであり、この時に朝帰りのイメージを付け加えたとは考えにくい。「新らしい半天」、「高足駄の爪皮も今朝より」を「誇らし氣」にしているということは、逆にまだ子供っぽいということになるのではないか。

次に半天に注目しよう。

群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の首筋に紺の腹がけ、さりとは見なれぬ扮粧と思ふに、しごいて締めし帶の水淺黄も、見よや縮緬の上染襟の印の染揚りも際だちて、（四章）

正太は印半天を着ているが、それは他の子供たちが「横町も表も揃浴衣は同じ眞岡木綿に町名くづし」に対応する「印」であろう。一方、長吉は「新らしい半天、印の傘」とあるように、傘の印と同じ印の半天であろう。「印半纏見てくんねえ。……鳶職のもの、鳶職のもの。」（泉鏡花「爪の涙」）とあり、鳶職と関わるものである（「上下を着た番頭や印物を着た鳶頭が忙しそうに出たり入ったりしている。」という例もある（久生十蘭「顎十郎捕物帳　金鳳釵」）。傘と半天はセットであり（あとで引用する鏡花の「山吹」に明らか）、山田氏の言う「登楼した廓の屋号の印の入った傘」とは考えら

れまい。ここで、傘の印をさらに検討しておこう。

大阪で明治二十年代半ばに発行された雑誌『なにはがた』に掲載された「徳用ばん傘」は傘に記された漢字から、屋号か地名かと推測して持ち主を探そうとする経緯が描かれている。したがって、印を伏せたい場合もある。以下を視野に入れておこう。

・三人は其儘其通りを大門の方へ歩いた。…結局其辺の茶屋で少し休んで行くことにした。（略）龍岡も阪口も今は軽い鼾をたてて眠つて居る。…九時頃、漸く三人は無印の番傘を二本貰ひ受けて、しと〳〵と降る秋雨の中へ出た。（志賀直哉「暗夜行路」）

・ふりし昔の大磯も、江戸の廓のよし原も、ながれは同じ隅田川、ちり浮く花を友として、つがひ離れぬ都鳥。（門の内より藤枝外記、廿五歳の武士。大菱屋綾衣、廿一二歳の遊女。むさしやと記せる貸傘を相傘にして出づ。あとより新造綾鶴出づ。（略）廓の門限は七つ半。今から歸つたら遲くもあるまい。）（岡本綺堂「箕輪の心中」）

・主人は私が腕時計を覗いたのを見て、お急ぎでしたら、と傘を貸してくれた。区役所からの帰り、市電に乗らうとした拍子に、畳んだ傘の矢野といふ印が眼に止まり、ああ、あの矢野だったかと、（織田作之助「木の都」）

・敦賀で悚毛の立つほど煩わしいのは宿引の悪弊で、その日も期したる如く、汽車を下ると停車場の出口から町端へかけて招きの提灯、印傘の堤を築き、（鏡花「高野聖」）

・半七は岸へあがつて金八に別れた。

「親分。傘を持って行きませんか。なんだかぼろ付いてきましたぜ」

「おめえのうちの傘には印が付いているだろうから、何かの邪魔だ。まあ、たいしたこともあるめえ。このまま行かう」（岡本綺堂「半七捕物帳　新カチカチ山」）

・あゝ、降つて来た。（井菊と大きくしるしたる番傘を開く）まあ、人形が泣くやうに、目にも睫毛にも雫がかゝつてさ。（略）あのこゝへ入らつしやりがけに、もしか、井菊の印半纏を着た男衆にお逢ひなさりはしませんでしたか。（「山吹」）

・女のは黒蛇目であつたが、冷たいものを手に持つのが厭だと見えて、彼女はそれを自分の側に立て掛けて置いた。其畳んだ蛇の目の先に赤い漆で加留多と書いてあるのが敬太郎の眼に留つた。この黒人だか素人だか分らない女と、（夏目漱石「彼岸過迄」）

このように印の傘は何かの記憶や手掛かりを喚起したり、屋号を宣伝するものであったり、その出所が明らかになるときに都合が悪いことがあり、遊郭のものもそれに該当しよう。「箕輪の心中」のは廓の外の茶屋のものであり、印があって

も、問題はない。時代が下がる「暗夜行路」のも茶屋だが、「廓がへり」とは違った意味で朝帰りであり、印の傘を忌避したのであろう。こうしたことを踏まえれば、山田説の傘の議論は斥けられるべきであろう。

【朝帰りの様相など】

続いて、廓に行く時や朝帰りの様子はどのように描かれるかを、「たけくらべ」を含めて見てみよう。

・走れ飛ばせの夕べに引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頬かふり、彼女が別れに名殘の一撃、いたさ身にしみて思ひ出すほど嬉しく、うす氣味わるやにたにたの笑ひ顔、（八章）

・てっきり吉原か玉の井辺りへ出掛けたのだろうと推測された。果して、権右衛門は眠そうな照れ臭そうな顔で帰って来た。皆んなと一緒に行けば権右衛門が勘定を払わねばならぬ、それを嫌ってこそ〳〵と一人で安女郎を買いに行ったのであろうと、三人の意見だった。…十六の春松がませて、こっそり女郎買いに行くのを見ると、心そゝられぬこともなかったが、女の肌ざわりよりも紙幣の肌ざわりの方がよかった。（「俗臭」織田作之助）

・また学生の分際でありながら文展に絵を運ぶという事は少年が女郎買いすると同じ程度において人目を憚ったものである。（小出楢重「めでたき風景」）

廓帰りは、人目を恥じたりするのが一般であり、年少の者が廓に行く時は「こっそり」と「人目を憚」るものであり、長吉の様子とは対照的である。

登場人物の置かれている世間的な立場に大きな違いはあるが、次のようなことも視野に入れておきたい。

僕は白状する。番新の手腕はいかにも巧妙であつた。併しこれに反抗することは、絶待的不可能であつたのではない。僕の抗抵力を麻痺させたのは、慥に僕の性欲であつた。

僕は霽波に構はずに、車を言ひ附けて帰つた。小菅の内に帰つて見れば、戸が締まつて、内はひつそりしてゐる。戸を叩くと、すぐにお母様が出て開けて下すつた。

「大さう遅かつたね」

「はい。非常に遅くなりました」

お母様の顔には一種の表情がある。併し何とも仰やらない。僕にはその時のお母様の顔がいつまでも忘れられなかつた。（鷗外「ヰタ・セクスアリス」）

【結論】

山田氏の従来の解釈を積極的に更新しようとする姿勢は、是とすべきであり、いわゆる「子供たちの時間」から、信如や美登利だけではなく、長吉もその世界から離脱するという「たけくらべ」全体の構図にかかわるのだが、信如と美登利だけが離脱するということが、逆に改めて確認できるという

ことになる。

それは次のようなこともうかがわれよう。

「あたいも、いまに稼いでお金を貯めて、お女郎買いに行くの、よしんベエを買いに行ってやらあ」

友達が売られたのを、お小遣をもらっておでんを食いに行くと同様に心得ている返答に、（中里介山「大菩薩峠白雲の巻」）

これは、もちろん「たけくらべ」の次の箇所を想起させよう。

だけれど彼の子も華魁に成るのでは可憐さうだと下を向ひて正太の答ふるに、好いじやあ無いか華魁になれば、己れは來年から際物屋に成つてお金をこしらへるがね、夫れを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、

女郎という身のつらさを子供が理解できずにいるというのは「たけくらべ」だけのことではないのである。美登利と信如だけが、「子供たちの時間」から離脱するように設定されているのである。

こうして検討してきたように、長吉の「廓内よりの帰り」の光景は、装束や場所、あるいは語りの問題など様々な情報を他の資料を踏まえて検証すれば、朝帰りと解するべきでないことは明らかであろう。字面に呪縛されて十分な掘り下げがないままに定説化されてきた一か所の〈注釈〉は、大枠の再検討とともに更新されなければならないのである。

（いずはら・たかとし／本学大学院教授）